Lost Clan

六々ミヲト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｏｓｔ　Ｃｌａｎ

【Ｎコード】
Ｎ２０８０Ｆ

【作者名】
六々ミヲト

【あらすじ】
その世界の人々は、二つに分けられていた。自分でも気付かないうちに・・・・・・。それは、魔術を与えられた者と、そうでない者――――。科学を手に入れた人間と、魔術を持った人間。二つのカナシキ生き物達が、世界の中で互いの存在を知ったとき、その哀しい戦いは始まった。

序

死ね

殺せ

―――――消えろ―――――

全て星の消えた世界。

闇よりも冥(くら)い宙(そら)空。

世界の始まり。

私達の始まり。

この星の、

今から一億年前――――――――――。

そこには、

繁栄を極めた都――――――。

そこにある幸福、富、力・・・・・・・。

誰もが追い求める物が、

そこには溢(あふ)れていた。

『オマエ　ノ　ノゾミ　ヲ　モウシテ　ミヨ』

それは、神に魅入られた者達・・・・・。

それは、神に見放された者達・・・・・。

身(み)体も心臓(こころ)も腐れ果て、

乾いた大地で朽ち果てる・・・。

叫び声。

また、殺戮（さつりく）――――――――――。

いつからか、

血が大嫌いになり、

何よりも、

血を求めるようになった――――。

『ソナタ　カナシキ　カイライ　ト　ナリ』

老婆の言葉。

それも今から一億年前――――――――。

私はいったい、

何人殺してきただろう――――――――。

長い長い、

眠りの中、

永遠(とわ)に続けと、

涙が零(こぼ)れた・・・・・・。

『ワレ　カイライ　ト　ナリハテ』

神の傀儡(かいらい)は言った。

『カミサマ』

この世界に、

神はいない。

信じて、

我等は神の傀儡となる。

神などいないと知りながら、

縋(すが)るものを求めた――――。

叫び声。

繰り返す、殺戮――――――。

何度目だったか・・・・、

とうに忘れた――――。

いつからか、

鉄臭(てつしゅう)が大嫌いになり、

何よりも、

鉄臭を好んでいた――――。

『オマエ　ハ　イツ　マデ　イキテ　イル』

そうやって私達は、

この世界で生き続けてきた。

ずっと、

ずっと・・・・・・。

―――――消えろ―――――

殺せ

死ね

壱　二人の転校生

古(いにしえ)の時代、世(よ)には闇魔術と光魔術が存在した。二つの相反(あいはん)する力は、次第に枝分かれし、後(のち)に沢山の魔術を生んだ。

しかし、その力に選ばれることのなかった者達は、選ばれし者達を忌み嫌った。

世は、二つに分けられた。

「力のある者」と「力のない者」に――――――――。

1

◇　◇　◇

「乖璃(かいり)！！」
少年が叫んだ。
「薫(かおる)！逃げて！！」
少女が返す。
「いやだ！乖璃も一緒に！！」
少年が手を伸ばした。
「だめ・・・・、だめえぇぇぇぇぇぇっっっっっっっ！！！！！」
絶叫が迸(ほとばし)る。
脳天を突き抜ける程の、悲痛な叫び。
頭を抱え、背を仰(の)け反(ぞ)らる。
「――――――かはっ・・・・・・・・！！」
少女は、血を吐いた。

◇　◇　◇

「初めまして、霞亮(かすみあきら)と言います。これからどうぞ宜しく」
新学期に入って暫(しばら)く。そのクラスには、転校生が来た。
話によれば、隣のクラスにも転校生が入ったらしい。全く同時期

に、しかもこの半端な時期、二人の転校生など珍しい。
霞亮と名乗った転校生。少女である。漆黒の髪は肩まで届き、同じ色の双眸(そうぼう)には、鋭い光が宿っていた。しかし、その瞳はどこか危なげであり、何者も寄せ付けぬ、そんな雰囲気を醸(かも)し出している。
「はい、皆さん。何か質問はありますか？」
先生が笑顔で呼びかける。
「・・・・・・・・・」
呼びかけに答える者は、いなかった。
皆がその不思議な転校生に、目を奪われていた。男子はおろか、女子までもが、その不思議な美しい容貌(ようぼう)に見とれていた。
可愛いのではない。美しいのだ。
「先生、ないようです。席はどこですか？」
亮が問うた。
教師は、その一瞬だけ現れた殺気と、押しつぶされそうな威圧感に、咄嗟(とっさ)に言葉が出なかった。
「え・・・・・・。ああ、あそこよ」
指差された方向を見る。列の最後尾。窓から二列目。
亮は、真っ直ぐそこに向かった。
空気が重くなる。誰も何も喋れなかった。
――――――キーンコーンカーンコーン
ふとチャイムがなり、皆の緊張は一気に解(ほど)ける。
教室は瞬く間に騒がしくなり、入り口付近に生徒が集まって来た。
転校生を見るためである。
騒々しい空間で、亮は一人、目を閉じていた。
周囲の音を全て聞く。全てが囁(ささや)きとなって、彼女の耳に届いていた。

――――――亮・・・・・・
不意に、聞こえた。

「昊」
小さい、呟き。
――――――そっちは・・・・・？
「大丈夫」
――――――良かった・・・・・。
「昨日の男がうるさい。今晩ヤレってさ」
――――――そう・・・・・・・。僕は構わないよ。
「なら・・・・・」
「ねえねえ」
「――――――！！」
突然話しかけられて、亮は不覚にもほんの一刹那だけ、動揺を表に出してしまった。もっとも、誰一人として気付いた者はいないのだが。
「あ・・・・ああ、何か用か？」
亮は予想だにしなかった突然の事態に、完全に冷静さを取り戻せないでいた。『彼』と話していたのが、聞こえたかもしれない。
「あるある。用ならとぉってもある！」
話しかけてきたのは、クラスの女子。二人である。
一人はうるさいぐらい大きな声で話しかけてくるが、もう一人は、彼女の後ろで腕を組みながらこちらを見ていた。
「アタシは、遊花華奈。で、こっちは、志悦美麗。アタシ達って、あなたの最初のお友達ィ？よろしくね！」
亮は、頑張って笑顔で答えようとしたが、頑張っても苦笑い程度だった。
「あ、ああ・・・・・・。宜しく・・・・・・」
と、ここで美麗が口を開いた。
「すまないね・・・・、転校生。こいつはこういう性格だから・・・・。せめて話しかけられたら、返してあげて」
華奈と比較すると、正反対に近い。
落ち着いていて、静かな喋り口調。それなりに整った顔立ちで、

物腰も柔らかだ。
華奈も、可愛いと言えば可愛いのだが、こういった手合いの人間は、亮は嫌いだった。
――――――キーンコーンカーンコーン
またチャイムが鳴る。皆々が急いで席に戻っていき、少し辺りが静かになった。
扉が開き、教師が入ってくる。
「皆さん、突然ですが授業変更です。今日転校して来た二人がもうすぐ帰らなければならないということなので、一校時目は学年集会になります」
その連絡を聞いて、皆は少し驚いたような顔をしたが、立ち上がってぞろぞろと体育館の方へ向かって行った。
「ねぇねぇ、帰っちゃうの？」
また、華奈と美麗が傍に来た。
「ああ、今日は少し忙しいんでな」
「そっか・・・。残念だけど、仕方ないね。じゃあせめて、体育館の場所まで案内するよ。ほら、華奈行くよ」
物分りもいい。追求してこない。こんな感じの人間は、他よりかなりマシだな・・・。
亮は考えていることは顔には出さず、淡々とした態度をとり続ける。
「ああ、助かるよ」

その日、突然現れ突然帰った二人の転校生は、学年皆が注目する話題の的となった。

「同じクラスの方が良かったかな？」
「いや、それは学校側も迷惑だろう。いくら意識を弄ったからといってな」
少年が問い、少女が答える。
「だいぶ暗くなったな。仕事も終わらせたし・・・・・帰るか」
少女が歩き出した。
「あっ、ちょっと亮！！」
少年が、亮の腕を掴んだ。
「何、昊？」
「自分の身体、見てみなよ」
言われた亮が自分の身体を見下ろす。
「あ・・・・・」
衣服は朱く染まっていた。
「そのままじゃ、警察が来るよ」
昊が、呆れたように嘆息を吐いた。
「・・・・・・ねぇ、昊・・・・」
亮の顔つきが、突然真剣になった。
と、
「！！」
突風が彼等を襲う。
「なっ・・・・・！」
「亮！！」
昊が手を伸ばした。が、
「くぁっ・・・・！！」
二人が同時に背を仰け反らせた。
「――――――――」
「え」
何か、聞こえた。
亮が必死に辺りを見回す。
「な・・・・に・・・・？」

光る物が、見える気がする。
「昊・・・・・・・！」
目線だけで辺りを見た。しかし、周囲には何もない。
「　　」
亮の目が、これ以上ない程見開かれた。

「亮！！」
こちらに向かって走って来る、一つの影があった。そのバックに、ゆっくりと歩いて来る二つの影が重なる。
「ねえねえ、今日どっか行こーよー。暇でしょ？」
華奈が、腕を掴んで引っ張るような仕草をする。
「場所によるな。お前のように暇ではないし」
亮は相変わらずな言い方で返した。
「え～」
華奈は口を尖らせる。
「行こぉ～よぉ～」
「その辺で止めとかないと、亮サマが怒り出すよ、華奈」
漸く到着した美麗が言った。
「だってえ～・・・・。何か言ってよ、真花ぁ～」
「・・・・・美麗に同じ」
ボソッという呟きが、逆に華奈には効果的だった。膨れっ面で華奈は黙る。
「お～い、お前等ぁ！ちょっと！」
呼び声が聞こえ、四人が振り向いた。
「なぁーによ、こんな時に？」
美麗が目を眇める。

「誰？」
亮が走って来た二人の男子を見て、怪訝そうな面持ちになる。
「え？ああ、そうか。俺は白鷺彩輝。で、こっちは押韻静。初対面だもんな、転校生！」
彩輝は、明るく言った。
「ああ、そう。私は・・・・・・」
「霞亮、だろ？」
静が亮の言葉を遮って代わりに答えた。
「え・・・・・」
一瞬呆気にとられた亮だが、すぐに我を取り戻す。
「あ、ああ。よく覚えていてくれたな・・・」
転校生が来てからもうすでに一ヵ月程は経過している。そんなに前の自己紹介を、他のクラスの男子生徒が覚えているのは以外だった。
「あっ、そうだった」
突然、彩輝がぽんと手を鳴らした。
「中介、お前んとこの担任が、明日少し早めに来いってさ。お前、何かしたのか？」
「さあ」
真花はどうでもよさげに呟いた。
「亮」
「！」
突然背後から降ってきた声に、全員が勢いよく振り向いた。
「昊・・・」
亮も、驚いたように呟く。
そのとき、静が微かに眉を寄せたことに、亮は気配で気付いた。
「どうしたの、昊？」
亮が近づいていくと、昊は子供のように拗ねた顔した。
「早く！！」
強引に亮の腕を掴むとぐいぐいと引っ張っていく。

「ちょっ、昊っ！！」

昊の静かながら圧倒される剣幕に負け、亮はそのままどこかに連れて行かれてしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2080f/

Lost Clan

2010年10月11日04時12分発行